

高 松 原 III

1985.2

長野県立飯田高等学校
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

高 松 原 III

1985.2

長野県立飯田高等学校

長野県下伊那郡上郷町教育委員会

は じ め に

飯田高等学校長 北 村 純

本校が大正十四年、この高松原に建設されてより、六十余年を経て現在に至っておりますが、その間整備、増改築等が適時行なわれて徐々に教育環境が整ってきております。特に五十一年には第二グラウンドの造成、五十九年には第二体育館の建設がなされましたが、この地が高松原遺跡の一環にあるため、その都度上郷町をはじめ関係各位のご協力を得て、埋蔵文化財の調査発掘がなされ、多くの遺跡や貴重な遺物の出土があり、高松原遺跡群を実証する報告書としてまとめられてきております。

近来高校進学率の上昇と生徒数の急増に伴い、本校も多数の生徒の受け入れを余儀なくされ、また教育の近代化に伴う施設設備の必要性、老朽校舎の改築ということから、主として東側にあった木造校舎、体育館等を解体撤去して、その跡地に四階建、二十スパン（約九十七米）の校舎を建設することとなりました。この広大な校舎は理科関係は勿論のこと、数々の特別教室や普通教室を含むものであり、近く現代教育にふさわしい施設を整備した近代建築が高松台上に出現するわけであります。これら施設の充実には県議松下逸雄同窓会長さん、前校長三浦宏先生、また地元の皆さん、県当局の理解と、ご尽力によるものであり感謝いたすところであります。

建設に先立ち埋蔵文化財の発掘調査が必要となり、前回と同様に上郷町教育委員会にお願いして、遺跡調査委員会を組織していただき、調査団長佐藤甞信先生を陣頭に、八月下旬校舎を撤去した後九月上旬に発掘調査を行なっていただきました。この跡地は校地として永年使用されたため、種々の校舎建設や廃棄物処理のため深掘りがなされており、遺跡試掘調査の結果残念ながら遺跡の破壊が各所にみられましたので、比較的手付かずと思われる箇所の発掘をしていただき、幸にして報告書の如き遺構を発見することができました。

ご多用中にもかかわらず発掘にご尽力をいただきました、上郷町教育委員会、調査団長佐藤甞信先生ほか関係者の皆さんに心からお礼申し上げますとともに、発掘完了をもって順調に建設に着手できますことを感謝いたす次第であります。

昭和60年2月

例 言

1. 本書は昭和59年度長野県立飯田高等学校改築に伴う昭和51年度グラウンド造成、58年度第2体育館建設時発掘調査に引続く用地内発掘調査報告書がある。
2. 本書は第Ⅰ次・第Ⅱ調査を総合して編集すべきであるが、時間時制約のため本次調査に主眼をおき、Ⅱ次調査資料を加えて高松原遺跡の全貌を知る手掛りを得るよう編集に配慮したが不十分なものであり、資料提供に重点をおいた。
3. 本書の編集・執筆は佐藤が担当した。
4. 写真は佐藤、遺構実測図は佐藤・牧内が、遺物の作図等は佐藤が、製図は田口が分担した。
5. 遺物実測図のうちピット内、また横に記してある数字は床面からの深さをcmであらわし、縮尺は図示してある。
6. 遺物は上郷町歴史民俗資料館に保管してある。

目 次

序	1
例 言	2
目 次	3
挿図目次	3
I 環 境	4
1. 自然的環境	4
2. 歴史的環境	7
II 発掘調査経過	7
III 発掘調査結果	12
1. 住 居 址	12
2. 方形周溝墓	13
IV ま と め	15
図 版	

挿 図 目 次

図1 高松原遺跡位置・地形図、及び周辺主要遺跡（1：30,000）	5
図2 高松原遺跡地形詳細図（1：5,000）	6
図3 飯田高校第2運動場建設用地内—I次調査遺構分布図	8
図4 飯田高校第2体育館建設用地内—II次調査遺構分布図	9
図5 高松原第III次発掘調査範囲図	11
図6 高松原第III次発掘調査遺構分布図	12
図7 高松原Ⅲ—2号住居址	13
図8 高松原Ⅲ—2号住居址出土遺物（1：3）	13
図9 高松原Ⅲ—1号住居址出土遺物（1：3）	13
図10 高松原Ⅲ—方形周溝墓I、Ⅲ—1号住居址	14
図11 高松原出土縄文前期末・中期中葉の土器（1：3）	17
図12 高松原出土座光寺原式土器（1：3）	18
図13 高松原出土中島式土器と弥生後期石器（1：3）	19

I 環 境

1. 自然的環境

長野県下伊那郡上郷町は、長野県の南端を南北に並走する赤石山脈と木曾山脈の間にある飯田盆地のほぼ中央に位置する。この地域は天竜川とその支流によって形成された河岸段丘上に、往古から人々の生活跡がみられる。

高松原遺跡は上郷町下黒田の小字高松原・高松・イカニ洞及び南原の一部を含む一帯に所在する。遺跡は長野県立飯田高校の敷地を中心に、北は上郷小学校、南は段丘突端、東は御殿山の手前を南流する小川、西は飯田高校グラウンド端までの12万㎡にわたる。その海拔高度は478～486mである。遺跡は段丘に形成された小扇状の一角に立地し、その地目は宅地を中心にグラウンド及び畑からなっている。この段丘と天竜川との比高差は81～89mである。

伊那谷の段丘は、『下伊那の地質解説』によれば、火山灰を基準にして高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・低位段丘Ⅱに編年されている。上郷町の段丘は、洪積土壌の分布する中位段丘・低位段丘Ⅰ及び沖積土壌のみられる低位段丘Ⅱに区分される。前二者は俗に上段と呼ばれている黒田地籍であり、後者は下段の飯沼・別府地区にあたる。低位段丘Ⅱは天竜川の現河床との比高3mを測る海拔400～405mの南条面、それとの比高差2mの海拔407～418mの別府面、その一段上の海拔420～430mの飯沼面に細分される。これら低位段丘Ⅱ地帯は、湧水が豊富で地下水も高く、沼沢的な凹地が多くみられ、典型的な水田地帯である。

高松原遺跡の立地する地帯は、低位段丘Ⅰのb面、いわゆる伊久間面にあたる。下段bの桐林面に相当する狭い小段丘との比高差が30～50mあり、急峻な段丘崖をもつ台地である。遺跡一帯の土壌を発掘調査時の層序でみると、耕作土下に黒色土・褐色土・ローム層・砂礫層の順で堆積され、地下水位の低さと相まって乾燥台地の特徴を示し、昔より今に至るまでの土地利用は畑である。

次に、上郷町の気象状況を『下伊那誌気象編』でみると、昭和28年から40年の年平均気温は13℃台、最暖月の8月の平均気温は25℃台、最寒月の1月の平均気温は1℃である。これは下伊那の気温分布をみた時、天竜南部の平岡地区に続いて暖かい地域と言える。また、年降水量は高陵中学校の観測で1631mm、下伊那地方では他地区に比較して少ない方である。さらに、風向きは季節による変化はあるものの、最多風向は西寄りの風が強く、日照時間は地形による地域差があるとは言え長い方である。以上のように、気象面から推察しても、当該地区は人類の居住に適した場所と言えよう。

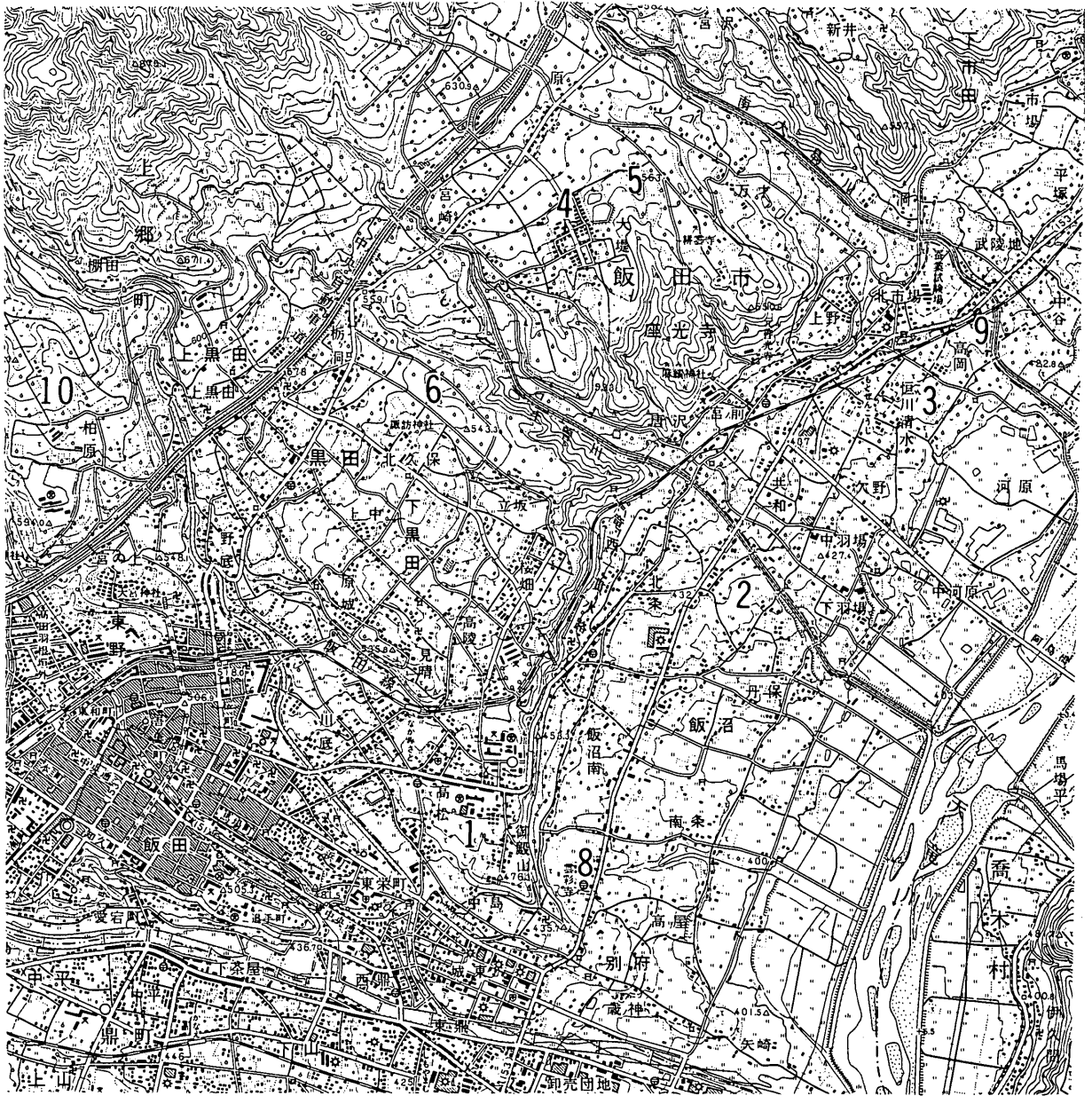


図1 高松原遺跡位置・地形図，及び周辺主要遺跡図（1：30,000）

- 1…高松原，2…堂垣外，3…桓川遺跡群，4…座光寺原，5…中島，6…大明神原，7…大門町
 8…雲彩寺古墳，9…高岡1号古墳，10…柏原

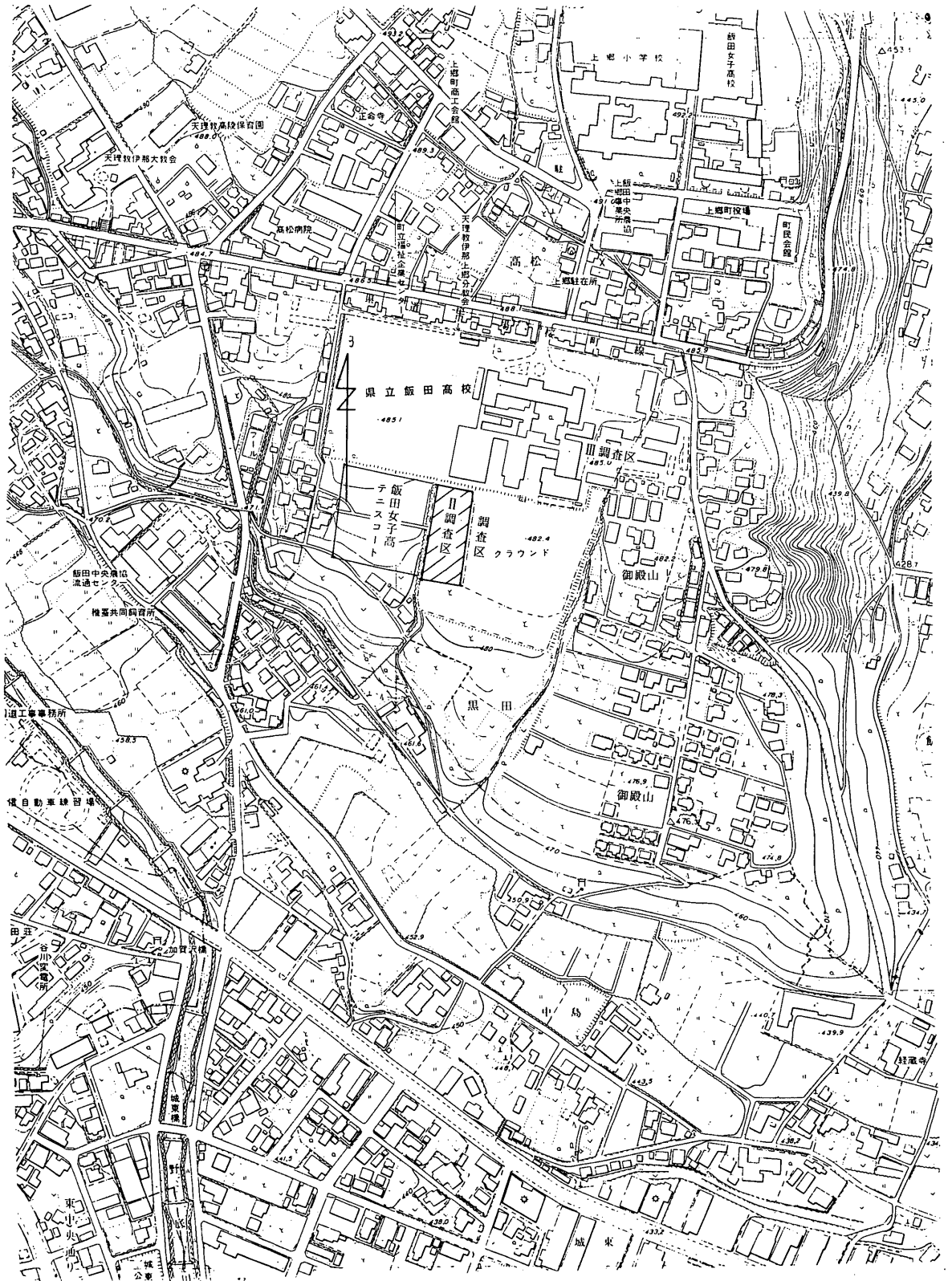


図2 高松原遺跡地形詳細図 (1:5,000)

2. 歴史的環境

高松原遺跡は標高480~490mの高松原段丘面の南端部に立地し、第Ⅰ次・第Ⅱ次発掘調査によって縄文前期末、中期中葉、弥生後期の集落の存在が確かめられた。高松原遺跡の所在する上郷町の遺跡を概観すると、昭和46年飯田高校考古学研究会により、町内全域の分布調査がなされ、さらに昭和57年度上郷町教育委員会による詳細な分布調査によって、一般遺跡69、古墳32基、域跡3の計104遺跡が確認されている。一般遺跡69か所を時代別にみると縄文時代50、弥生時代47、古墳時代21、奈良・平安時代65、中世42となっている。

縄文時代では野底川を逆上った谷間の姫宮遺跡で草創期の表裏縄文土器片が発掘調査によって検出され、柏原台地の山裾近くよりこの期とみられる石器が地主によって採集され保管されている。早期の遺跡は発掘調査例はないが、比較的山寄りの扇状地に僅か採集され、前期になると遺跡数はやや増えてはいるが低位段丘面の飯沼・別府では未確認である。中期には南条最下位段丘面を除き全地域にみられている。これが後期には衰退を示し8遺跡、晩期には3遺跡と減少を示すのは飯田地方にみられる現象である。

弥生時代は前期は未発見であり、中期では堂垣外の発掘調査では阿島式、北原式の好資料の出土をみており、低位段丘に中期土器が多く表面採集している。後期になると全段丘面・扇状地に遺物の散布がみられ、山裾の柏原遺跡では座光寺原式の甕の完形品さえ出土している。

古墳時代では、古墳32基があり、後期古墳である。大半が別府台地端部に並び1部が黒田と飯沼に散在する。天神塚（雲彩寺古墳）は前方後円墳であり、県史蹟指定となっている。集落をみると14か所があげられているが別府・飯沼の低位段丘面にあり、中期から後期にかけてのものである。高松原段丘面より上の台地には僅かに遺物の散布をみるにすぎない。

奈良・平安時代には全域に遺跡が広がり、堂垣外の周辺は座光寺恒川遺跡群との関連がみられる。

上郷町外の近隣の主要遺跡をみると、縄文時代では、野底川を隔てた大門町遺跡では中期中葉の好資料が発掘され、北の土曾川を隔てた座光寺原は弥生後期前半の座光寺原式、中島遺跡は弥生後期後半の中島式土器の標準遺跡であり、天竜川を隔てた低位段丘面にある阿島遺跡は弥生中期阿島式土器の標準遺跡である。座光寺恒川遺跡は弥生中期後半恒川式土器の標準遺跡であり、国道153号座光寺バイパスに伴う発掘調査で弥生中・後期、古墳時代前～後期、奈良・平安時代の貴重な資料の多く出土し、また、遺構・遺物からみて郡衙址ともみられる重要遺跡であることが確認された。これに隣接する高岡1号古墳は県指定の史蹟となっている。

Ⅱ 発掘調査経過

昭和59年度、長野県立飯田高等学校校舎改築工事が上郷町黒田450番地に実施されることになった。この用地は高松原遺跡の一環となっている。

この用南に接する飯田高校第二運動場は、その建設時、昭和50年10月14日～11月20日の日曜日、祝祭日を利用し、遺構確認調査をなし、弥生後期住居址8軒と、1基の竪穴の存在が確認された。このため51年3月、大沢和夫を団長とする調査団を組織し、3月8日～4月4日までと、4月、5月の日曜日、祝祭日を利用した春季調査が行われ、7月20日～9月5日までの夏季調査が実施された。

調査結果、(図3) 弥生後期では住居址35軒・土壇2基・掘立柱建物址8基・囲溝遺構2基と縄文中

期土壙85基が発掘され、これら時期の遺物の多くの出土をみ注目される。その報告書「高松原—伊那谷弥生後期集落の研究（本文編）1977・3」が飯田高等学校・高松原遺跡調査団によって刊行されている。

（図3参照）



図3 飯田高校第二運動場建設用地内——Ⅰ次調査遺構分布図

（N…中島式住居址）

（「高松原—本文編」1977・3による）

昭和58年度、飯田高校第2体育館が第2運動場—第Ⅰ次調査区—の西に隣接して建築されることになり、これに伴う発掘調査を飯田高校は上郷町教育委員会に委託した第Ⅱ次調査が58年7月24日より8月20日まで実施された。その結果（図4）、住居址13軒（縄文前期末2、中期中葉3、弥生後期8）、建物址1、柱穴群2、土壙20が調査され、各期の好資料を得ており、その報告書「高松原Ⅱ」が飯田高等学校・上郷町教育委員会によって1984年3月刊行されている。

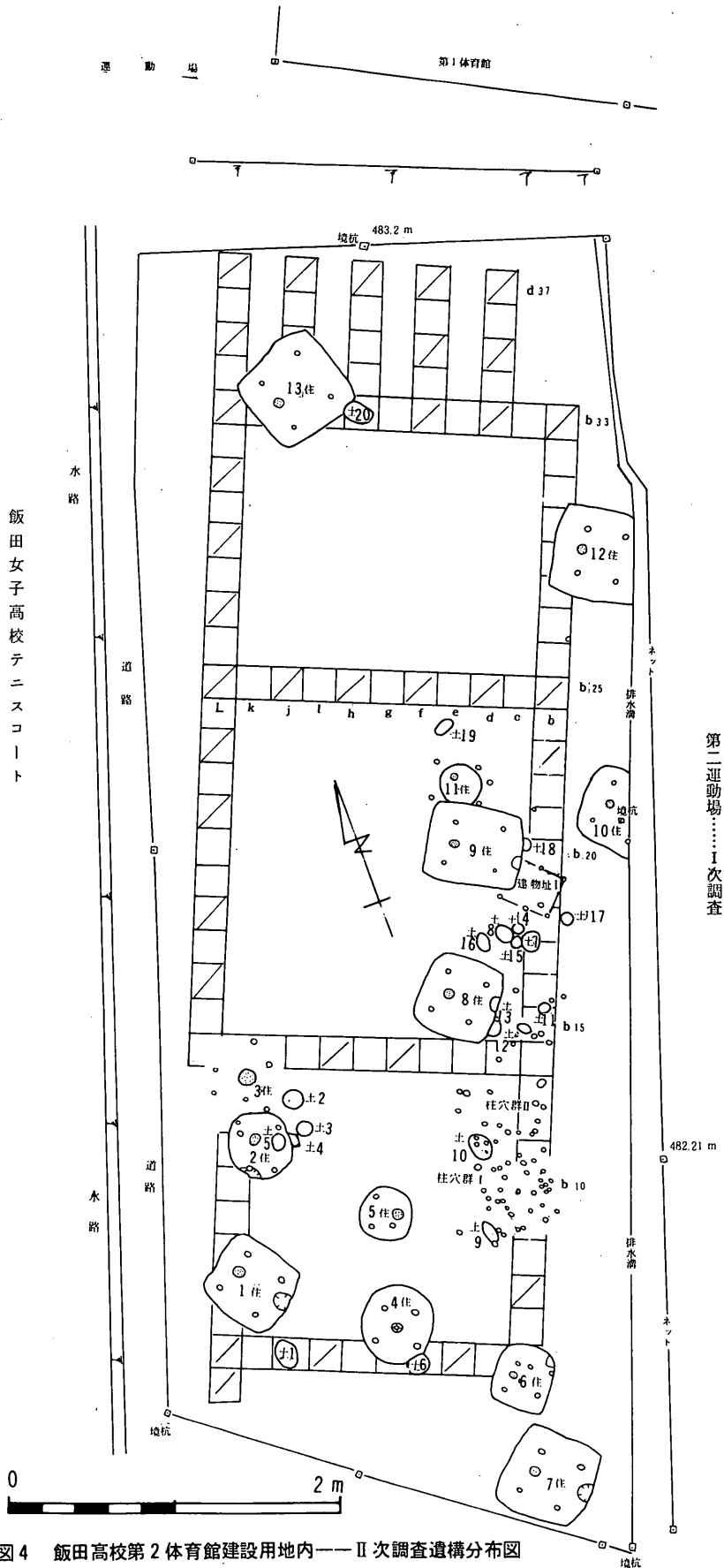


図4 飯田高校第2体育館建設用地内——Ⅱ次調査遺構分布図

第Ⅲ次調査区域には特別教室・東体育館・職員宿舎等があり、これらを壊して新校舎が建設されることになった。校舎建設用地と、その周辺の井水設置、その他整備地区を含め全面積4,000㎡である。しかし特別教室の多くは建替え、増築が行なわれており、空地はごみ捨穴が個所に掘られており大半は破壊されていた。そのため、最も破壊の少ないとみる東体育館と生物・地学・美術教室のあった間の空地400㎡に調査区域を設定し、東と南の校地境に設置する井水については立合調査することとした。校舎撤去あとは大きなコンクリートの基礎が部分的に残っており、その排除は重機によろざるをえず、遺構検出に苦労を重ねた。

発掘調査日誌

9月3日（はれ・くもり・にわか雨） 器材運搬、グリッド設定、調査にかかる。中央部に落ちこみあり、拡張調査、周溝墓とみる。校舎取り払い後の残物の埋めこみあり苦労する。

9月4日（はれ・時々くもり） 朝、重機により表土及び校舎撤去の残物の排除。周溝の検出、幅1.8m位となり、方形に廻る溝をなし方形周溝となる。主体部を検出する。

9月5日（はれ） 周溝検出作業、南・北中央部の溝断面調査。周溝幅2m余となり、さらに西に延び、北の西半分は校舎取壊しのコンクリート片を埋め、南の西半分には校舎の基礎コンクリートがあり、重機により排除。東の大銀杏の抜根をなす。

9月6日（はれ） 方形周溝墓ほぼ掘上げ、周辺、周溝内を整地する。

9月7日（くもり・時々はれ） 方形周溝墓完掘、写真撮影・測量をなす。Ⅲ-1号住居址検出、南側2分の1は周溝で切られる。南側は張り床となり、その下に縄文中期住居址あり、Ⅲ-1号住完掘、写真撮影、測量をなす。

9月8日（朝、作業直後、はげしい雨となり休憩・くもり） Ⅲ-2号住居址調査、3分の2は周溝で切られる。完掘、写真撮影・測量をなす。遺構分布調査、全景写真撮影をなし、調査を終了する。この間、東と南の井水設置個所の立合調査をなすが遺構検出なし。

9月10日（はれ） 器材を撤収する。

現場調査終了後、遺物・遺構図の整理、遺物実測、製図をなし報告書作成にとりかかる。

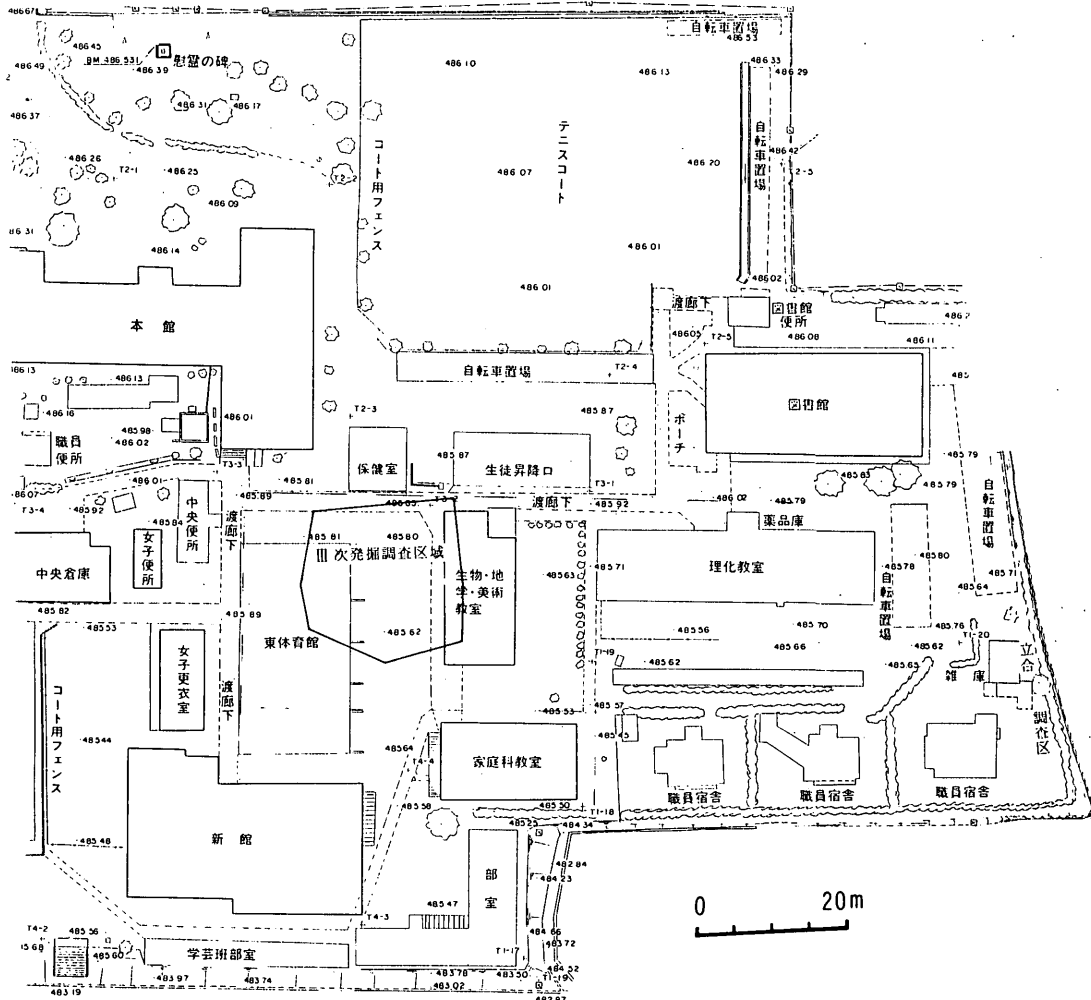
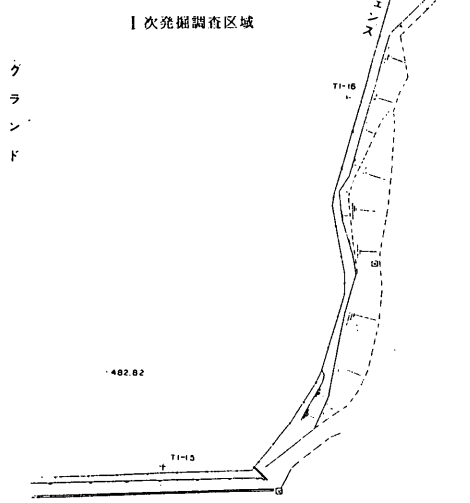


図5 高松原第三次発掘調査範囲図



Ⅲ 発掘調査結果

新校舎建設のため調査前にあった特別教室・東体育館は取り壊され、その残骸は用地内に埋められ、整地されていた。撤去校舎の建築・建替え等により、大半は破壊され、表土は削りとられ、全面は整地によりローム面となっていた。上層部を削り暗黒色土の落ちこみ部の発見によって遺構は検出された。

本次一第Ⅲ次発掘調査された遺構は次のようである。

1. 住居址 2軒—縄文中期中葉1、弥生後期1
2. 方形周溝墓 1基

本次調査の遺構番号は、Ⅰ・Ⅱ次調査遺構と区別するためⅢ—を付すことにした。

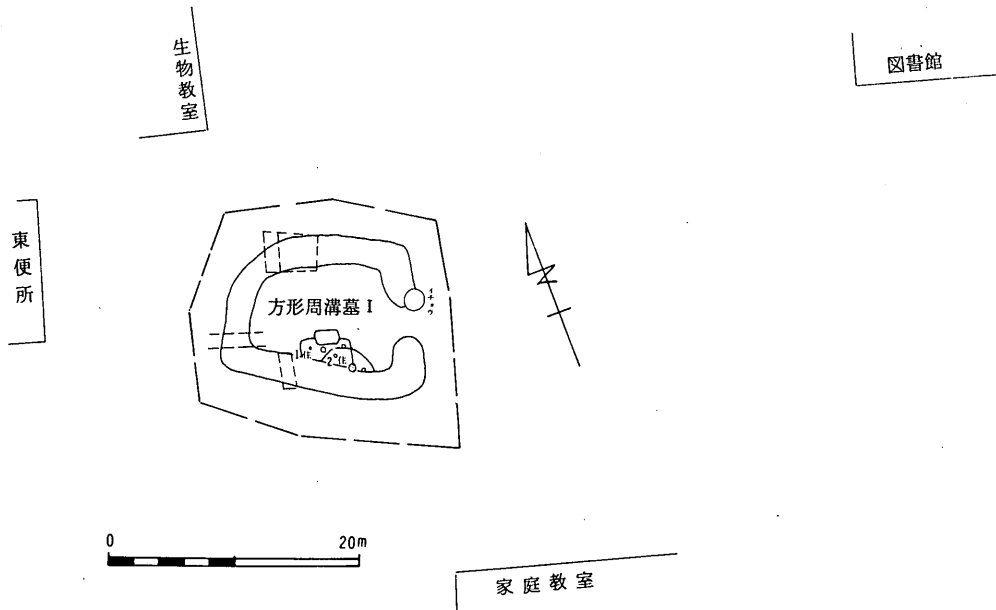


図6 高松原Ⅲ次発掘調査遺構分布図

1. 住居址

Ⅲ—2号住居址(図7)

方形周溝墓Ⅲ—1号の南周溝に3分の2は切られ、Ⅲ—1号住居址の下に4分の1がある。東西径推定4.7mとみる円形をなし、ローム層に30cm前後の深さに掘りこむ竪穴式住居址である。床面は堅く、柱穴2こが発見されているが、その配置からみて主柱穴は4ことみる。炉址は中心より北東に片寄っており、半円状に3この石を置いたとみられる痕跡を残す石囲炉である。炉址の北西に隅丸方形の浅い掘りこみが付くが、性格は不明である。

遺物(図8)は少なく、土器は1が文様をもつ以外無文の小片数点があるのみである。口縁部は縦の太い隆帯により区画され、その間に爪形文による三角形の区画文を施す縄文中期中葉藤内Ⅰ式に比定される土器とみられる。石器は3点のみで、2は凝灰製の横刃形石器、重量30g。3は刃部を欠く打石斧で硬砂岩製。4の磨石は花崗岩製、重量655gであり、敲打器ともみられるが打痕がみられない。

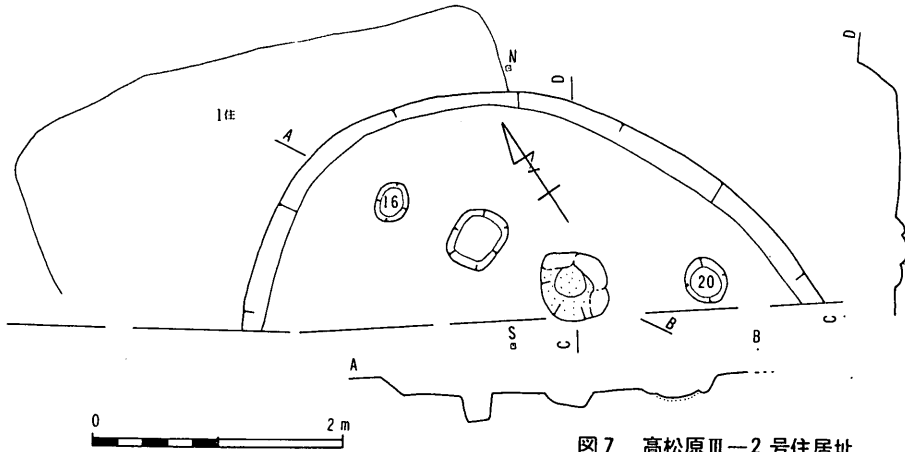


図7 高松原Ⅲ-2号住居址

Ⅲ-1号住居址(図10)

方形周溝墓の南周溝により2分の1余は切られ、東から南の大半はⅢ-2号柱の上に張り床でのっている。また北壁中央部の僅かが周溝墓主体部で切られている。東西4mの方形。ローム層に20cm前後掘りこむ竪穴住居址である。柱穴2こが検出されているが、その配置から支柱穴4こみえる。北側柱穴間の中央部に炉址があり、炉甕の抜かれた痕跡を残す。

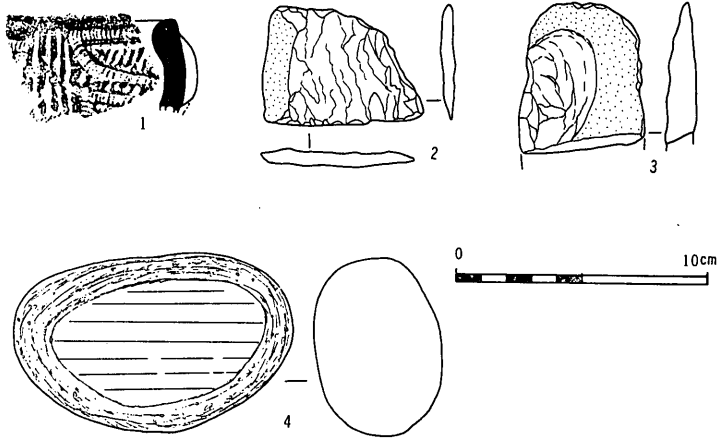


図8 高松原Ⅲ 2号住居址出土遺物(1:3)

遺物(図9)は少なく、土器片を僅かにみたにすぎない。1の甕の口縁部の綾い曲線をもち、2にもみる稚拙な波状文は座光寺原式にみるものであり、3は無文の頸部であり台付甕とみられる。4は壺形の底部である。

2. 方形周溝墓

Ⅲ-1方形周溝墓I(図10)

高松原遺跡Ⅰ次・Ⅱ次・Ⅲ次調査を通じ発見された唯一の方形周溝墓である。調査区域のほぼ中央部にあ

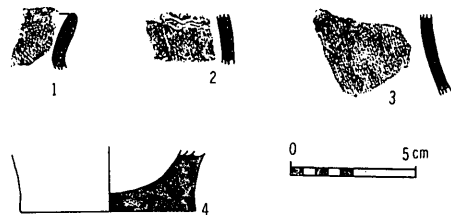


図9 高松原Ⅲ 2号住居址出土遺物(1:3)

り、南周溝はⅢ-1号住、Ⅲ-2号住を切っている。南北11.3~12.5m、東西15.2mの範囲に幅2m余、深さ50cm前後の周溝をめぐらし、東側に幅2mの陸橋をもつ。(陸橋部は渡廊下となっていた所でコンクリートを除去するため荒れていたが周溝の底部近くの両側に陸橋の痕跡を残し判明した。)主体部は中心部より南に片寄っており、1.8×1.1mの隅丸長方形をなし、深さ25cmローム層に掘りこむ土壇であり、主軸方向N50Wをさす。

遺物は周溝内よりは無く、主体部より僅かに弥生後期甕形土器の無文の小片の出土をみたのみであり、これらはⅢ-1号住のものともみられる。Ⅰ次・Ⅱ次調査にみられた弥生後期の大集落の存在か

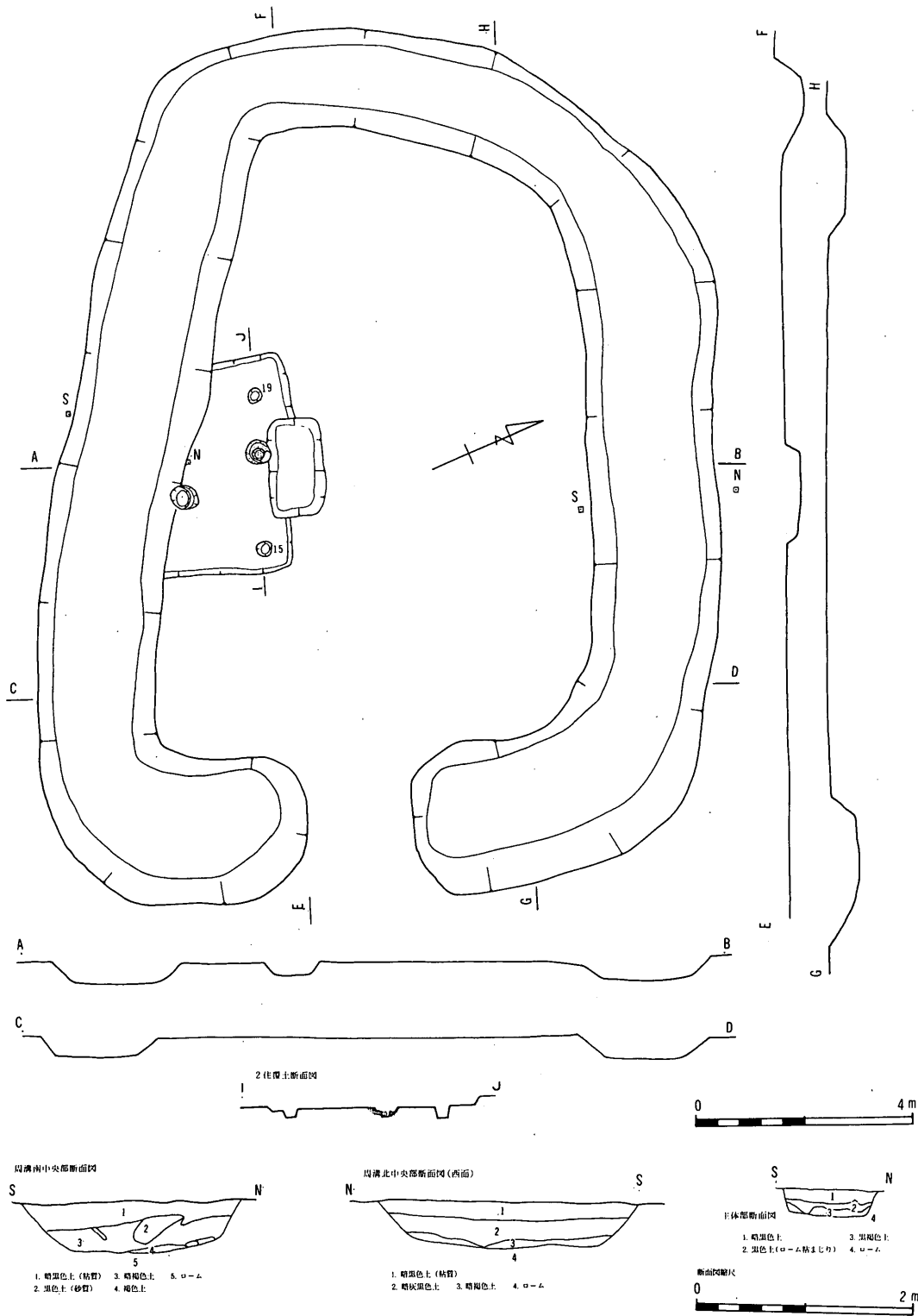


图10 高松原Ⅲ—方形周溝墓Ⅰ, Ⅲ—1号住居址

らみて、方形周溝墓構築の位置からみて、弥生後期の周溝墓であることは間違いないであろう。

IV ま と め

高松原第Ⅲ次調査区域はⅠ次調査区の北60m、比高差3m高位の校舎建設により平坦にされているがもとは、緩い傾斜をもつ扇状地の南端部の北に位置する所にあり、Ⅰ・Ⅱ次調査区と校舎によって段をもって区画されているが同一面上の遺跡である。

校舎建設、建替え、年々に掘りこまれたごみ穴等により遺構の大半は破壊されたとみる。このため今次調査は比較的破壊の少ないとみるを選び調査区域を設定した。その結果、縄文中期中葉藤内式住居址1軒、弥生後期座光寺原式住居址1軒と方形周溝墓1基が発掘調査された。

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ次調査を通じ検出された遺構には、縄文時代—前期末住居址2軒・中期中葉住居址4軒。土壇100余基、柱穴群2があり、これらのうち後期前半の土器の出土をみたものがある。

弥生時代後期—座光寺原式住居址39軒・中島式住居址5軒、掘立柱建物址9株、囲溝遺構2、土壇数基、方形周溝墓1基がある。

縄文時代では前期末・中期中葉・後期前半の遺構が検出されているに対し、飯田地方の段丘上に最も多くみられる中期後半の遺構の未発見であることが注目される。

縄文時代の土器(図11)をみると1・2は前期末諸磯式Cがあり、3は中期中葉前半の猪沢式であり、これと伴出した4は阿玉台式。5は平出Ⅲ類Aに比定される。また、図8の1は藤内Ⅰ式である。図示しないが後期前半の土器は堀之内式に比定される関西系土器が主体となっている。

石器は図示しないが前期末には打石斧・磨石斧・石匙・石錘・凹石があり、中期中葉には打石斧・横刃形石器・磨石斧・石錘・石鏃・敲打器等があるが、それ等出土量は中期後半に比し少ない。

弥生時代の遺構はいずれも後期であり、座光寺原式が主となり、住居址での中島式の比は8:1となる。

土器をみると座光寺原式(図12)では壺・甕・高杯があり、中島式(図13の1・2)は壺の好資料は少なく、座光寺原式とは差はあまりみられない。甕は1にみるように口縁部は鋭く外反を示し、波状文は洗練され、また無文化してくる。2は欠山式の台付甕で東海地方のこの期の土器の伴出がみられる。

弥生時代後期の石器(図13の3~11)は飯田地方では中期の石器が器種・量とも多いのに比し激減を示す。また後期でも座光寺原式と中島式での変化も大きい。3~8は座光寺原式住居址であり、9~11は中島式住居址出土である。器種・量ともその相違がみられる。中島式でも座光寺原式石器の伝統を継ぐが、打製石包丁は数を増すが他の器種の出土器は僅少となる。鉄器による木器等の農耕具の進歩がうなずけられる。

3次にわたる飯田高校用地内の調査は終了をみたわけであるが、その結果、飯田高校用地北を北限とし、西側の飯田女子高校テニスコートは未調査のまま建設されたが、南側の段丘縁部に沿ってさらに各期の集落は展開されているとみられ、主要な遺跡であることが確められた。残された遺跡の宅地化は進んでいるが、その保護が要望される。

おわりに、本次調査にあたって飯田高等学校の示された御好意・御援助があり、残暑きびしい中、作業に尽された方々の熱心な作業態度があったことが大きな力となったことに深謝したい。

(佐藤 甦 信)

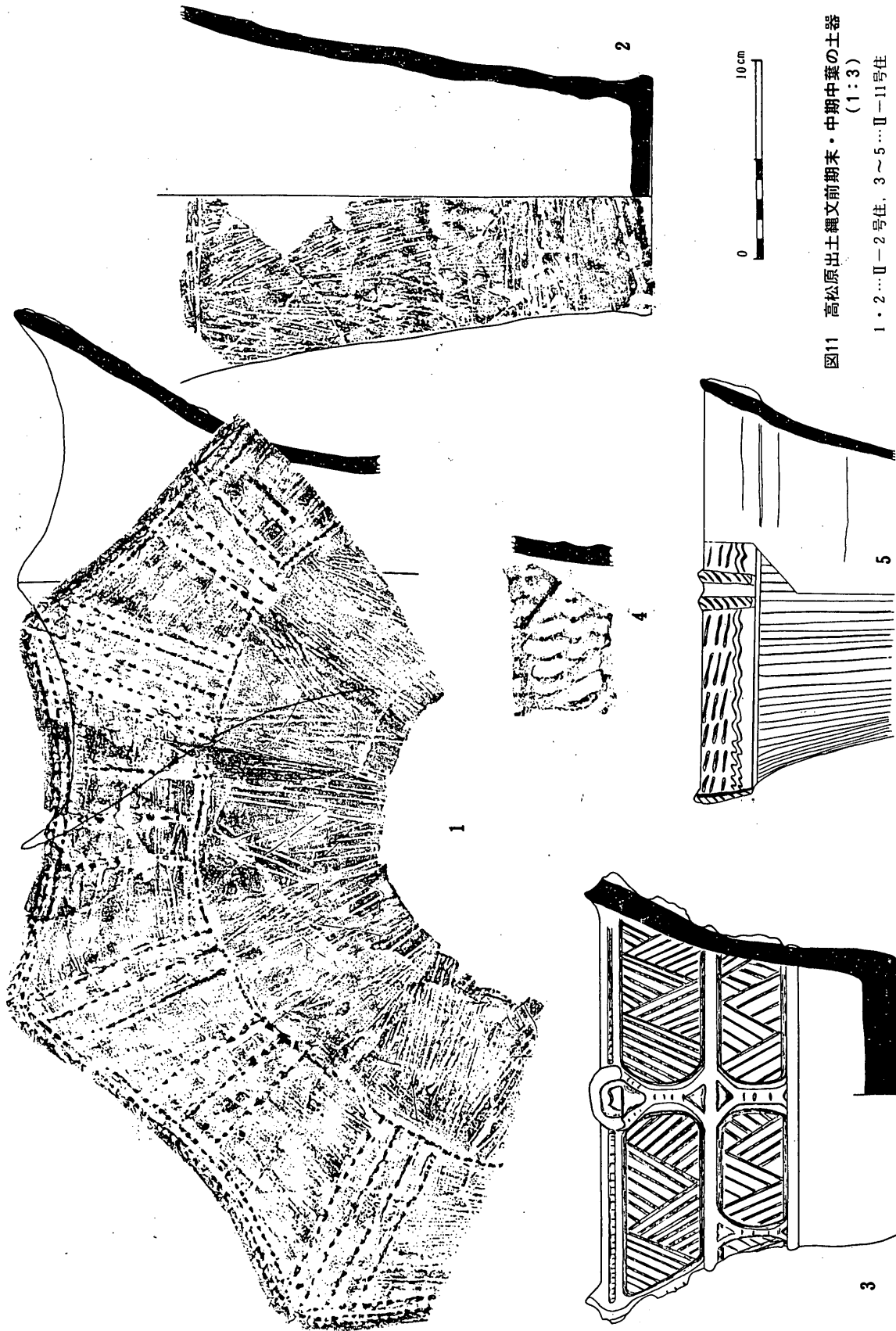


図11 高松原出土縄文前期末・中期中葉の土器
(1:3)

1・2…Ⅱ-2号住, 3~5…Ⅱ-11号住

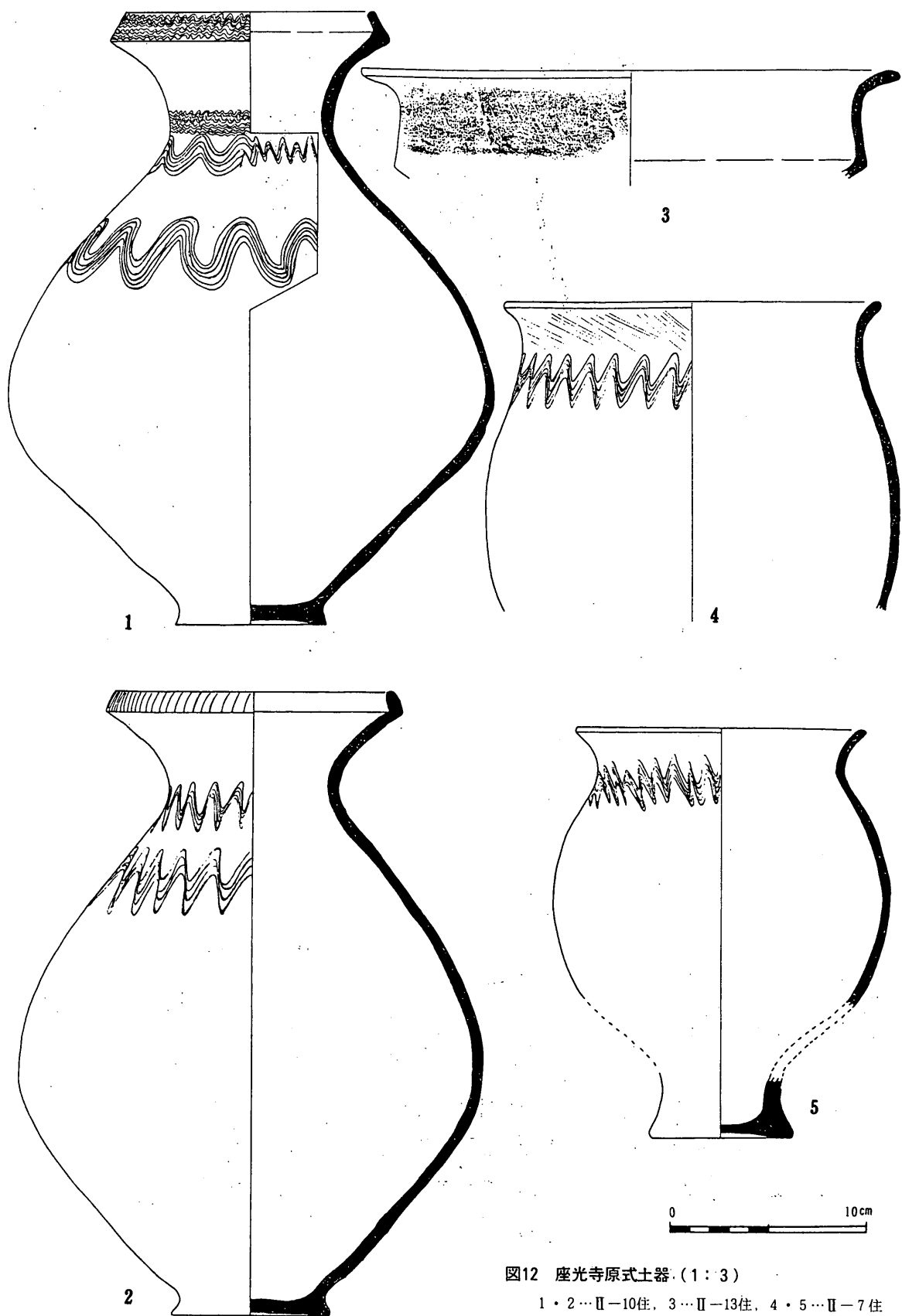


图12 座光寺原式土器。(1:3)

1・2…Ⅱ-10住, 3…Ⅱ-13住, 4・5…Ⅱ-7住

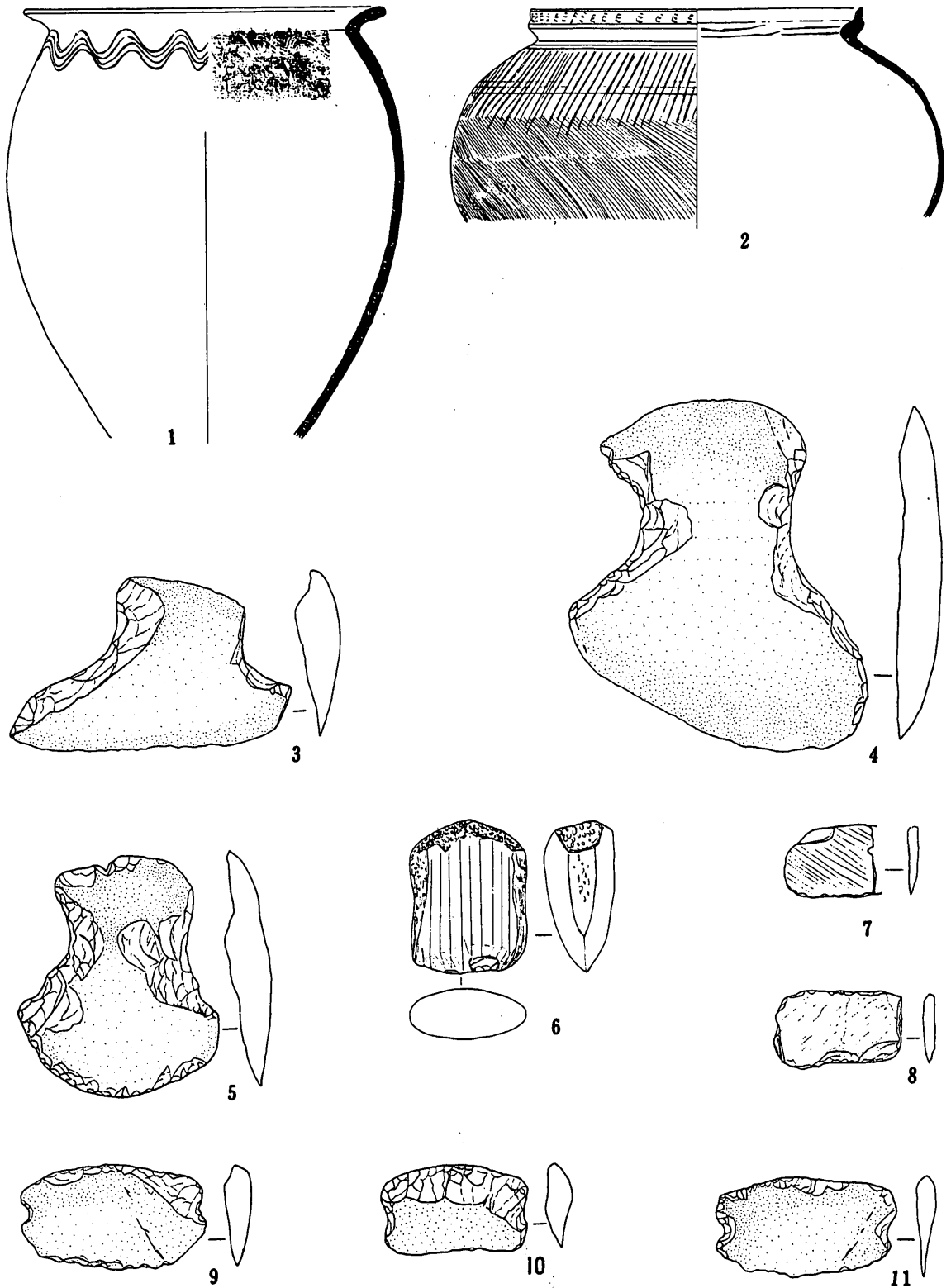


图13 中島式土器と弥生後期石器 (1:3)

1・2…Ⅱ-6住, 3~8座光寺原式住居址出土石器
9~11…中島式住居址出土石器

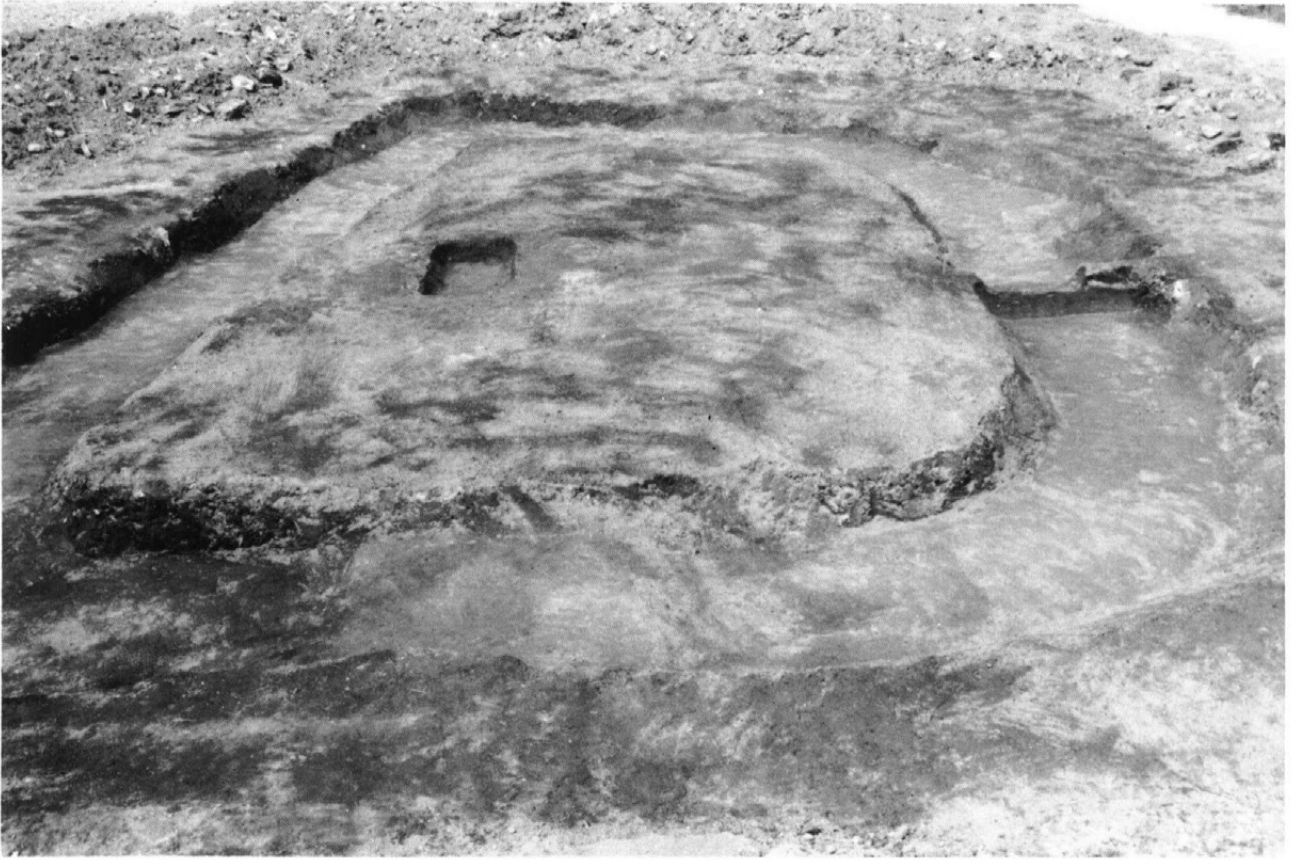
0 10 cm



校舎建設用地—特別教室を撤去したあと—東より



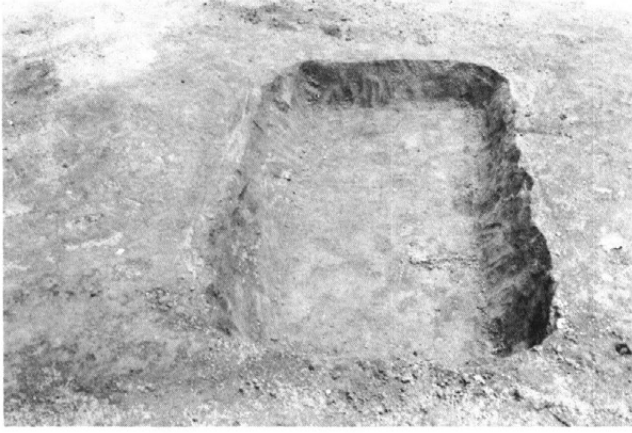
校舎建設用地—特別教室を撤去したあと—南西より



方形周溝墓Ⅲ-1号——東より



方形周溝墓Ⅲ-1号西より



方形周溝墓Ⅲ-1号 主体部



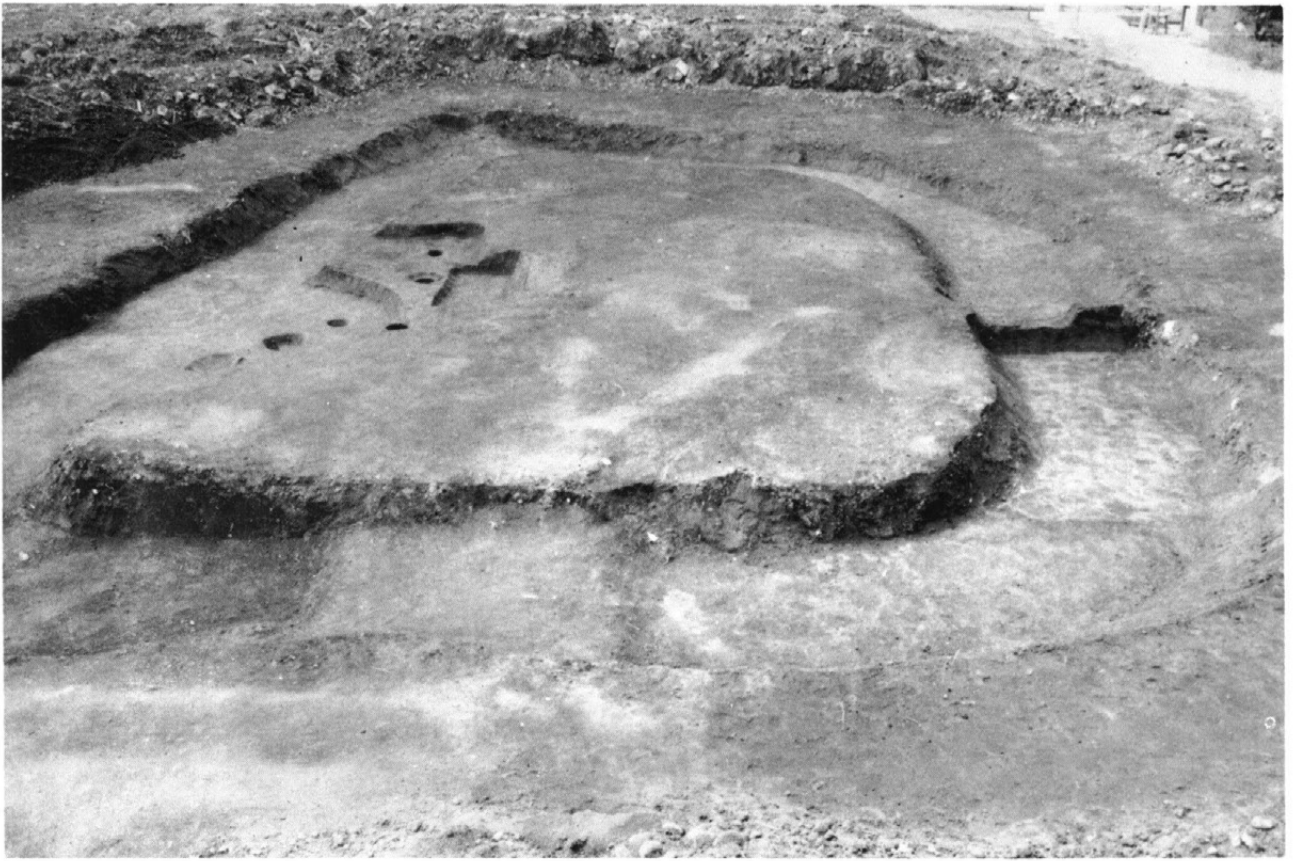
方形周溝墓Ⅲ-1号 周溝覆土断面



Ⅲ-1号住居址
北側の一部を方形周溝墓
主体部で、南側は周溝で
切られる



Ⅲ-2号住居址
Ⅲ-1号住の下にあり
南は周溝で切られる



高松原Ⅲ次調査遺構全景—東より



高松原Ⅲ次調査遺構全景—南新校舎より

発掘スナッフ



調査にかかる——北より



調査にかかる——東より



重機により表土排出



方形周溝墓の調査



方形周溝墓の調査

調 査 組 織

1. 高松原調査委員会

岡田 道人	上郷町教育委員会委員長
関島 昌平	同 教育長
北原 忠夫	同 委 員
小室 伊作	同 委 員
矢崎 和子	同 委 員
小木曾英寿	上郷町文化財保護委員会委員長
牧野 光弥	同 委 員
麦島 正吉	同 委 員
稲垣 隆	同 委 員
菊本 正義	同 委 員
北村 純	長野県立飯田高等学校校長
東原 美寅	同 事務長

2. 調 査 団

佐藤 甞信	日本考古学協会会員 調査団長
牧内 佳子	長野県考古学会会員 調査員

3. 顧 問

大沢 和夫 長野県考古学会会長
長野県教育委員会文化課指導

4. 事 務 局

関島 昌平（教育長） 東原 美寅（県立飯田高等学校事務長）
篠田 公平（教委事務長） 吉川 勝一（社会教育係長社教主事）

5. 発掘作業従事者

福島 明夫	松下 真幸	大島 利夫	吉川 正美
菊本 正義	後藤 好男	関島 安雄	島岡 吉次
橋爪 忠吉	吉川紀美子	北原 弘子	

6. 遺物整理・製図

佐藤いなゑ 田口さなゑ

お わ り に

昭和60年以降において県立飯田高等学校の校舎一部改築工事が行なわれる運びとなりました。同校敷地一帯は周知の埋蔵文化財の包蔵地高松原遺跡となっており、昭和58年度に同校第2体育館建設に先がけて行った高松原遺跡発掘調査（既報・高松原Ⅱ）に続いて昭和59年度においても発掘調査を実施し、記録保存をはかる必要がありました。

年度当初から調査団長佐藤甞信先生の意見を得ながら同校と当町教委の事務レベルの協力により、今回調査の準備を進めておりましたが、昭和59年8月7日付で県立飯田高等学校校長北村純先生を甲とし当教育委員会教育長関島昌平を乙として高松原遺跡の発掘調査の委託契約をなしました。一方文化財保護法57条3第1項通知書は7月7日付同校長名で、又同法98条2第1項通知書は8月3日付当方教育長名で長野県教育委員会（文化課）を経由して文化庁に通知しました。

今回総事業費は850,000円で全額学校側で負担、当町教育委員会が受け直轄事業として行なうことになり9月3日発掘作業が開始されました。

発掘作業は残暑きびしく、さらに旧校舎基礎コンクリート除去など既設の設備、大樹木根除去に大変な労力を要したが予定通り発掘作業を進めていただくことができました。その後の整理調査の活動報告事項の執筆等を含め、佐藤先生をはじめ牧内調査員、諸作業に従事していただいた諸兄姉の多大な尽力や学校側の協力さらに整理、製図の陰のお力添えを賜りながら本報告書の刊行に至りました。

この間の各位の御支援と御協力に深く感謝の意を表します。

当調査の結果は昭和59年度高松原Ⅱに続き記録保存にふさわしく、今後の考古学研究に大きな貢献となるものであり、文化財保護の精神を後世に継ぐためにも重要な意義をもつものと確信します。

昭和60年3月

上郷町教育委員会
高松原遺跡発掘調査委員会

高松原Ⅲ

長野県立飯田高等学校
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

1985.2

印刷 株式会社 秀文社
